

風姿花伝第二、物学条々

鬼

これ殊更大和の物なり。一
大事なり。凡そ怨靈憑き
物などの鬼は、面白き便り
あれば易し。応対者を目
がけて、細かに足手を使ひ
て、物頭を本にして、働け
ば、面白き便あり。誠の冥

〔口訳〕

鬼の物真似は、大和猿楽の特有の芸である。殊に重大なむづかしいものである。一体に、同じ鬼でも、怨靈や憑き物等の鬼は、面白く演じる便りがあるから演じ易い。あひしらひの者を目がけて、細かに手足をつかひ、物頭を本として働くやうにすれば、面白く演じる便りがある。所が、眞の冥途の鬼は、上手に模すればただ怖ろしいばかりで面白さは全く欠けてしまふ。これは実は、あまりにむづかしいので、それで面白く演じ得る者が稀なのであらうか。先づ鬼の本領は強くて怖ろしく

途の鬼善く学べば、恐ろしき間、面白き所更になし。

なればならぬ。所がこの「強くて怖ろしい」といふことは、面白いといふ感じとは、非常な相違である。

誠は、余りの大事の態なれ

ば、是を面白く為る物稀な

る歟。先本意は、強く恐ろ

しかるべし。強きと、恐ろ

しきは、面白き心には変は

れり。

抑、鬼の物真似、大な

る大事あり。能為んにつけ

て、面白かるまじき道理あ

り。恐ろしき所、本意な

り。恐ろしき心と、面白き

とは、黑白の違ひなり。さ

元来、鬼の物真似には、非常な難問題がある。それは、上手に演ずれば演ずるほど、面白くなくなるといふことである。鬼は怖ろしい所が本領である。所が、怖ろしい心と面白いといふ心持は、黑白の違ひである。だから、鬼を演じて、それで面白い所がある役者だつたら、それは能を究めつくした上手といふべきであらう。しかしながら、鬼能だけが上手なといふ役者は、特に花といふことを知らぬ役者であ

れば、鬼の面白き所あらん

おもしろ

為手は、究めたる上手とも

申べき歟。

さりながら、鬼

神を能く為ん物は、殊更花

を知らぬ為手なるべし。

されば若き為手の鬼は、よく

為たりとは見ゆれ共、面白

からぬ理あり。鬼ばかりを

善くせん物は、鬼も面白か

るまじき道理あるべきか。

精しく習ふべし。たゞ鬼の

面白からん嗜み、巖も花の

咲かんが如し。

らう。それで、若い役者の鬼は、たとひ上手に演じたやうに見えても、一向に面白味はないものだといふわけがある。更に言へば、鬼能ばかりが上手ないものだといふ理由がありさうに思へる。これは精しく研究しなくてはならない。ただ「鬼の面白い」といふことを研究してみると、「巖に花が咲いたやうだ」といふ一言に尽きる。

怨靈憑物などの鬼が、面白き便りがあるから、容易であるといふことは、前の物狂ひの憑物の条を参照すれば、極めて明白になるであらう。又その面白さの手だては、その次に「あひしらひを目がけて云々」といふ語があつて、具体的にも説かれて居る。

問題は、怖ろしい鬼を面白く思はせる公案である。これに關しては、

鬼の面白い所のあるシテは、究めたる上手といふべきである。

鬼ばかりを上手にするシテは、花を知らぬシテといふべきである。

若きシテの鬼は、上手に演じても、面白からぬ道理がある。

鬼ばかりが上手なシテは、鬼も面白くない道理がある。

といふ四つの暗示的な表現だけで、最後の説明はわざと略してある。そしてそれは公案として残され、解決は、別紙口伝に於て与へられてゐる。曰く、

鬼ばかりを善くせん者は、鬼の面白き所をも知るまじきと申したるも、物数をつくして、鬼を珍らしくし出したらんは、珍らしき所花なるべきほどに、面白かるべし。余の風体はなくて、鬼ばかりするを上手と思はば、善くしたりとは見ゆるとも、珍らしき心あるまじければ、見所に花はあ

るべからず。「巖に花の咲かんが如し」と申したるも、鬼をば、強く怖しく肝を消すやうにするならでは、凡その風体なし。これ巖なり。花といふは、余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と、人の思ひ慣れたる所に、思の外に鬼をすれば、珍らしく見ゆるところ、これ花なり。然れば、鬼ばかりをせんずるシテは、巖ばかりにて、花はあるべからず。

結局、鬼の花は、珍らしさにあるといふのである。説きつくし得て余蘊なしといふべきである。鬼ばかりを上手にするシテに花がなく、鬼も面白くないのは、結局それが度々やられる為に、見物に珍しき感がないによる。又年若きシテの鬼に面白味のないのも、これはまだ「余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と、人の思ひなれ」てゐない故である。鬼を面白く演じ得るシテは、究めたる上手であるといふのは、その人が、すべての風体を残さずして、幽玄至極のシテと見物に思はれて居るに依るのである。

この鬼の物真似は、後年の二曲三体絵図には、更に二つに分けられて、碎動風鬼と力動風鬼の二つとせられ、碎動風までを学ぶべく、力動風は稀にのみ演すべきことを力説してゐる。この二分説と、憑物の鬼と冥

途の鬼との二分説とを、比較して見れば、更に面白いであらうと思ふ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著